

大崎下島御手洗における花街の景観と生活

加藤 晴美

I はじめに

本稿は広島県大崎下島御手洗を事例として、瀬戸内海の一港町における花街の景観と、そこで暮らす芸娼妓や彼女らを取りまく地域住民の生活について検討するものである。

集娼制度が確立されたとされる江戸時代以降、全国各地の城下町や宿場町、鉾山町、港町などに多くの遊廓や花街が成立した。こうした遊廓や花街について、地理学では「盛り場」という観点からの検討が行なわれており、文学作品を題材として京都新京極を検討した山近¹⁾や、茨城県潮来における花街の景観を復原した前島²⁾などがある。また、加藤は都市の「遊興空間」としての花街の創出と再編の過程を、近代都市の形成と関連させて論じた³⁾。

しかしながら、これらの研究では比較的大規模な都市の花街を取り上げ、その立地や景観、成立と変遷などを明らかにするものが多く、そこに暮らす芸娼妓や、それに関わる地域住民の生活自体については十分に議論されていない。このため、本稿では地方の花街に焦点をあて、その景観の復原とともに花街を取りまく地域社会のあり方を考察する。

筆者はすでに、港町である千葉県銚子市において、利根川河畔の河岸に置かれた松岸遊廓の成立と変遷を検討した⁴⁾。上記の視点からみた場合、松岸では貸座敷(妓楼)や引手茶屋など、芸娼妓が暮らす空間は江戸吉原などと同様に「廓」として囲われ、周辺地域からは隔絶された存在となっていた。一方、本稿で事例とする御手洗の花街は多人数の娼妓を抱えていながら、吉原や松岸とは異なり、閉鎖された「廓」の形態をもつ「遊廓」ではなかった。御手洗では芸娼妓を「ベッピン」、

「ベッピンさん」と呼んでいたが、この呼称は差別的な意図を含むものではなく、むしろ地域住民が持つ、芸娼妓らへのある種の親しみを表したものと受け取ることができる。それは御手洗における花街が、大都市に置かれた閉鎖的な花街(遊廓)とは異なり、地域住民との密接なつながりを持ちながら維持されてきたことを意味している。本稿では、一般的に閉鎖的な場所として、あるいは「悪所」としてイメージされがちな花街(遊廓)が、地域社会において実際にはどのように捉えられ、地域住民とどのような関わりをもっていたのかを検討することも課題の一つとしたい。

本稿は、まず御手洗における花街の成立について概観したのち、御手洗において置屋が集中し、花街としての機能を有していた築地通りの昭和初期における景観を復原する。また、聞き取りをもとに昭和30年(1955)前後のベッピンの生活について記述していく。その際、ベッピンと地域住民との関わりや、地域住民のベッピンに対する意識についてもあわせて検討していくこととしたい。

II 御手洗における花街の成立と変遷

1) 花街の成立

ここではまず、御手洗における花街の概要とその成立について、簡略に述べておきたい。

一般に、明治33年(1900)に発布された「娼妓取締規則」によって、近代の遊廓・花街の管理制度が確立したとされている。これによって、唄や舞踊などの芸を披露する芸妓と、売春を業とする娼妓との分離が進められた⁵⁾。近代の御手洗においても芸妓と娼妓は分離され、旅館・料理屋などに招かれて芸を披露する芸妓はオカゲイシャ(岡芸者)、それ以外の娼妓はオキゲイシャ(沖芸

者),あるいはフナゲイシャ(船芸者)と呼ばれて明確に区別されてきた。このうち、港町としての性格に由来する御手洗独特の遊興制度を担ったのは、娼妓であるオキゲイシャであった。

オキゲイシャとは、オチョロ舟と呼ばれる小船に乗って港の停泊船に漕ぎ寄り、売春業とともに洗濯や清掃など船員の身の回りの世話まで行う遊女(娼妓)のことである。寄港した船に遊女を乗せた小船で近寄り、遊女を船に宿泊させる私娼形態は御手洗に限らず多くの港町でみられるものであり、利根川沿いの境などの「船女房」、大阪の「一升ビン」などが良く知られている。御手洗において、こうしたオキゲイシャの制度は近世初期から売春防止法が施行された昭和33年(1958)まで持続されていた。

このようなオチョロ舟の制度は、港町としての御手洗の発展を背景につくられた。清水が指摘したように、御手洗は北前船によってもたらされる米をはじめとする物資の中継港として、寛文6年(1666)に初めて屋敷地の造成が許可された⁶⁾。正徳期(1711~15)には町年寄役が置かれ、この時期に御手洗の港町としての地位が確立したと推測される。港町としての機能が整えられていくに従

い、しだいに寄港船の船員を客とした食糧や飲料水などの販売、船宿や料理屋、風呂屋などの接客業に従事するため、近隣地域から御手洗に移住する住民が増加していった。御手洗では、増加する人口に対応するために、文政12年(1829)には埋立てが行なわれ、屋敷地の拡大がはかられた⁷⁾。この際に埋立てられたのが現在の住吉地区の「築地」と呼ばれる区域であり、後述するように、この埋立て地域を中心に花街が形成された。

第1表に御手洗における遊女屋に関わる事項を示した。御手洗における遊女に関する最も早い記録は、元禄5年(1692)にドイツ人医師ケンペルが著した『江戸参府旅行日記⁸⁾』と考えられる。伊予の怒和島を出発したのち風待ちのために御手洗に入港したケンペルは、そこで30艘ほどの停泊船の間を、「ヴィーナスの姉妹たち」を乗せて漕ぎ回る2艘の小船があったことを記述している。これは港町としての開発が行なわれはじめてからまもない時期に、すでにオチョロ舟に乗った遊女の存在があったことを示すものである。

御手洗において、はじめて公式に許可された御茶屋は、享保9年(1724)に茶屋株を得て開業した若胡屋である。おはぐる伝説⁹⁾で知られる若胡

第1表 御手洗における花街の変遷

年	事項
元禄5(1692)	ケンペル、『江戸参府旅行日記』に御手洗の遊女について記述
享保9(1724)	若胡屋、茶屋株の許可を得て開業
延享・寛政期 (1744~51)	堺屋・藤屋が開業
宝暦3(1753)	海老屋が開業
明和5(1768)	若胡屋、御手洗の住居免許を獲得。藩へ冥加米を差し出す
安永7(1778)	経営困難のため、茶屋に5年間の出来銀減額許可が出される
天明4(1784)	経営困難のため、再び茶屋に5年間の出来銀減額許可
文化3(1815)	海老屋、経営困難により当主失踪。海老屋は組合預けとなる
文政13(1830)	扇屋・藤屋・堺屋・二葉屋・富田屋・中津屋などの遊女より、住吉神社へ玉垣を寄進
大正8(1919)	広島県警察署により、オチョロ舟による沖での稼ぎを禁止。御手洗町側は猶予期間を申請
大正15(1926)	木ノ江警察署において「芸娼妓保護規定」作成。1月より実施
昭和5(1930)	御手洗小学校長・御手洗町長の発案により、「芸妓学校」を創設
昭和6(1931)	不況による置屋の営業不振のため、芸妓が「沖出稼ぎ」に進出。このころより芸妓・娼妓の区別が不明確に
昭和33(1958)	売春防止法施行

(豊町教育委員会所蔵新聞記事、『豊町史』により作成)

屋に続いて藤屋、堺屋、海老屋が開業し、18世紀半ばまでに4軒の御茶屋（遊女屋）が成立した。若胡屋は周防上関、堺屋は蒲刈、海老屋は伊予の出身とされており、これらの御茶屋は船に遊女らを乗せて御手洗を来訪し、停泊船を相手に商売するうちに定着したといわれている。また、成立時期は不明であるが近世後期にはこの4軒のほかに、扇屋・大坂屋・二葉屋・富田屋・中津屋などが御茶屋として営業していた。

遊女数についてみると、そのピークは18世紀半ばごろであったと推測される（第2表）。宝暦5年（1755）には100名であった遊女数はその後しだいに減少し、約100年後の慶応2年（1866）には41名と半数以下になっている。宝暦期（1751～63）において最も遊女数が多く、40名以上を抱えていた若胡屋も慶応2年には遊女数は14名となっており、経営規模が大きく縮小していたであろうことがわかる。なかでも海老屋の経営難は著しく、文化3年（1815）には当主が失踪した。海老屋は組合預けとなり、海老屋の所有していた茶屋株は千歳屋に引き継がれた。こうした御茶屋の縮小は、安永7年（1778）より2度にわたり、御茶屋に賦課されていた出来銀の5ヶ年間減額が許可されていることからもうかがえる。

第2表 御手洗における遊女数の推移

年	遊女数（人）			
	若胡屋	藤屋	海老屋	3軒の合計
宝暦5（1755）	46	27	27	100
明和5（1768）	47	24	23	94
天明元（1781）	35	22	14	71
享和元（1801）	45	25	14	84
享和3（1803）	42	24	8	74
文化5（1808）	37	24	15	76
文政4（1821）	44	15	4	63
天保11（1840）	18	9	4	31
弘化元（1844）	16	12	4	32
弘化3（1846）	14	11	4	29
嘉永6（1853）	9	9	12	30
慶応2（1866）	14	14	13	41

（『豊町史』により作成）

2）近代以降における花街の変遷

近代以降も、御手洗の花街は存続し、最終的に売春防止法が施行された昭和33年（1958）まで営業を継続していた。しかし、近世期に御手洗に置かれた御茶屋の多くは近世末期から近代以降に廃業したと推測され、御茶屋のひとつである若胡屋は廃業後、寺院や劇場として使用されていた。なお、本来近代の公娼制度上、娼妓は貸座敷とよばれる妓楼でのみ売春を行なうことが認められていた。そのため、オチョロ舟に乗って停泊船に出向くことは制度上違法であったが、実際にはこの行為は黙認され、第二次大戦後までオチョロ舟での営業が継続されていた。

近代以降、御手洗の花街は置屋を中心として維持されるようになった。一般的に置屋とは芸妓を抱え、客からの要望に応じて旅館や料理屋、貸席などに芸妓を派遣する店のことを指す¹⁰⁾。しかし、御手洗では芸妓・娼妓ともに置屋に抱えられており、置屋は旅館などに芸妓を差し向けるだけではなく、ときには置屋に客を迎え入れ、飲食を提供するとともに宿泊をさせることもあったようである。停泊船に赴くオキゲイシャたちも置屋に所属しており、ここを居住の場としていた。御手洗においてこれらの店は公式には置屋と表記されることが多いが、地域住民は通常置屋とは呼ばず、これを指して「オナゴヤ」と呼んでいたという。

オナゴヤの軒数を正確に把握することは困難であるが、八重垣正夫氏による昭和2年（1927）の土地利用図には12軒のオナゴヤが示されている。また、豊町の昭和26年（1951）事業所統計調査では、14軒の置屋が存在していることがわかる。聞き取りによれば、売春防止法が施行される直前の昭和30年（1955）ごろまで11軒のオナゴヤが営業していたという。すなわち、オナゴヤの軒数そのものは昭和初年から売春防止法施行直前までおよそ十数軒程度で推移し、さほど大きな変化はみられなかったと推測される。芸娼妓の人数についての統計調査などはみられないものの、御手洗において昭和戦前期には80名から90名ほどいたとい

うベッピンは、戦時中より次第に減少しはじめ、昭和30年ごろには約30名と大きく減少していったという。

このような変化は、昭和戦前期の不況及び、戦時下における花街に対する統制の影響によるところが大きいと推測される。第3表は、大正期から昭和初期の御手洗における遊客数及び売上高の推移を示したものである。これは必ずしも正確な数字ではないと推測されるが、大正後期から昭和5年（1930）まで、遊客数は年間6,000～8,000人程度、売上げは2万円前後で推移している。しかし、昭和恐慌期の昭和10年（1935）には、遊客数・売上げともに大きく落ち込んでいる。

ベッピンの減少とともに、昭和初期ごろからしだいにオキゲイシャ（娼妓）とオカゲイシャ（芸妓）との区別は不明瞭になったとされる。さらに戦後になると、芸事のできるオカゲイシャは消え、ベッピンのほとんどが娼妓であるオキゲイシャになったといわれている。オカゲイシャの減少と関連してか、芸妓の案内所としての役割を担った芸妓検番は戦後に廃止され、検番が立地していた場所では新たにオナゴヤが開業されたという。

一方、大正期には公娼制度改正の動きの中で、オチョロ舟での冲出稼ぎが広島県警によって禁止された。御手洗町側は2年間の猶予を求めるなどしてこれに対抗していき、実態としてはその後もオチョロ舟での商売は維持され、むしろオキゲイシャの割合が増加したようである¹¹⁾。オキゲイシャの増加過程については、昭和6年（1931）に本来旅館などでのみ営業していた芸妓が沖での商

第3表 御手洗における花街の遊客数及び売上高

年	遊客数（人）	売上高（円）
大正14（1925）	6,997	23,435.90
大正15（1926）	6,550	19,864.35
昭和2（1927）	6,429	19,831.40
昭和4（1929）	7,421	32,559.10
昭和5（1930）	8,426	25,117.00
昭和10（1935）	368	1,094.00

（『豊町史』により作成）

売を開始するようになったことを報じた、「芸妓の海上進出に円満妥協成立せず」と題された新聞記事¹²⁾からその事情の一端をうかがうことができる。この記事によれば、芸妓のみを抱える置屋が不況の影響を受けて経営不振に陥ったことから、その打開策として「海上進出」をはかり、オチョロ舟を持つようになったと述べられている。またオカゲイシャの「海上進出」に対しては、「娼妓館」からの強硬な反対があったと述べられているが、芸妓側はこれを押し切って「沖での商売」を開始したとされる。すなわち、昭和初年まではオカゲイシャとオキゲイシャとの区別はかなり明確であり、置屋もオカゲイシャを抱える店とオキゲイシャを抱える店とが区別されていたことがわかる。さらに、記事が報じられた昭和6年前後より、オカゲイシャの沖への進出という形で、その区別が崩れ始めたのではないかと想像される。

Ⅲ 昭和初年における築地通り周辺の景観

次に、置屋が集中しており、花街としての機能を有していた築地通り周辺の景観を検討してみたい。築地通りは御手洗集落の南部に位置する住吉神社から、海岸に沿って伸びている。この部分は、前述の通り、文政期（1818～30）に埋め立てられた地域であった。

第1図は八重垣正夫氏作成の土地利用図をもとに、昭和2年（1927）における築地通り付近の商店の分布とその業種を示したものである。前述のとおり、御手洗の花街は芸娼妓を抱えるオナゴヤ（置屋）を中心として構成されていた。まず、築地通り周辺に12軒の置屋が集中していることがわかる。オナゴヤは海岸沿いの築地通りに面した表通りに立地しているものが多く、ここが花街としてのメインストリートであったことがうかがえる。

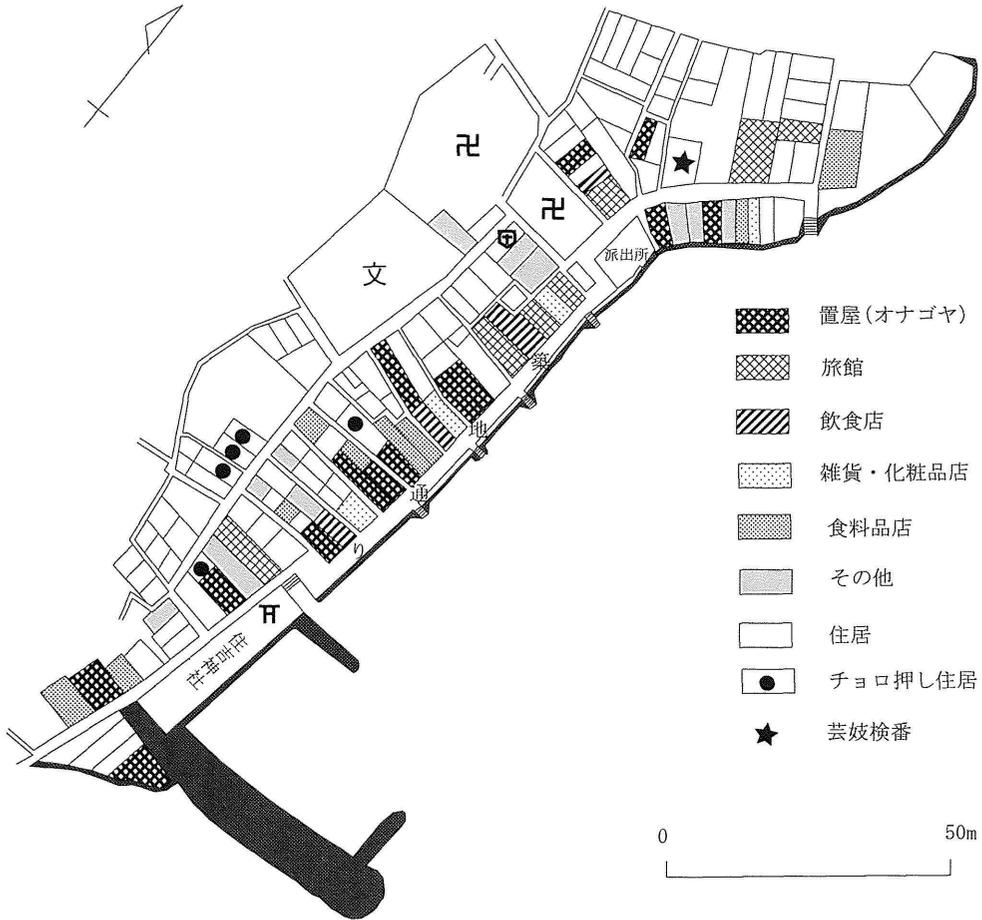
築地通りには、派出所の北側に芸妓協同組合の事務所でもあった芸妓検番が置かれていた。芸妓検番は近代の花街を構成する要素のひとつであり、芸妓が所属する置屋と彼女らが差し向けられ

る旅館・料理屋などを仲介し、芸妓の派遣や料金・時間の設定などの業務を取り仕切っていた。また、御手洗の検番は娼妓の案内所としての役割も担っており、オナゴヤに宿泊して遊興する遊客はここでその日に営業している娼妓の名札を確認し、その後にオナゴヤへと向かうシステムになっていた。

築地通り周辺にはオナゴヤのほか、旅館や飲食店・髪結い・湯屋など花街と関係の深い業種もみられた。築地通りの飲食店には遊客を対象として営業する居酒屋が多く、他に仕出し料理を扱う料理屋などもあった。聞き取りによれば、遊客が旅館やオナゴヤに宿泊する際には、この仕出し料理

屋から料理を取り寄せることが多かったという。ただし、カフェーや仕出し料理屋、食堂といった飲食店、撞球場や映画館などの娯楽施設は築地通り周辺だけでなく、これに隣接する蛭子地区にも分布していたことは清水が指摘している通りである¹³⁾。すなわち、オナゴヤ及び芸妓検番とこれに関わる飲食店など、花街を構成する業種は、築地通りを中心としつつ、町場の広い範囲に分散していたことがわかる。

このように、築地通りが御手洗の花街として機能していたことを第1図から読み取ることができる。ただし、築地通り周辺は花街として他の地域社会から隔離されていたわけではなく、派出所や



第1図 昭和初年における築地通り周辺の景観
(八重垣正夫氏作成土地利用図により作成)

病院など地域住民の生活に欠かせない施設や、米穀店や酒店といった食料品店、燃料店、雑貨店なども混在していた。

昭和22年（1947）の「配給台帳」からは、住吉地区の世帯の構成と世帯主の職業を知ることができる（第4表）。ここでは戦後まもないこともあってか、オナゴヤを指す「特殊飲食業」は1軒確認できるのみである。ただし、この世帯には家族以外に芸妓もしくは娼妓と推測される8名が記

載されていることが注目される。そのほか、飲食業3軒や旅館2軒など、花街を構成する要素となる業種がみられる。さらに第4表では、住吉地区には花街に関係するサービス業に従事する人々だけでなく、鉄鋼業・新聞記者・船大工・農業・教員など、花街とは直接の関連を持たない職業に従事する住民も多く居住していたことがわかる。このような住民のほとんどは、置屋などが立ち並ぶ築地通りの裏手に居住していた。

第4表 住吉地区における世帯の職業と人数（昭和22年）

	世帯主の職業	世帯主		世帯人数		備考
		性別	年齢	家族	その他	
住吉1区	-	女	37	2		本籍地は長崎県壱岐郡 本籍地は大崎南村
	無職	男	43	5		
	鉄工業	男	60	3	4	
	接客業	女	24	1		
	飲食業	女	62	2		
	旅館・回漕業	男	53	3		
	飲食業	男	65	2	2	
	新聞記者	男	50	2		
	船大工	男	32	5	5	
	-	女	26	1		
	無職	女	74	1		
	-	男	72	1		
	無職	男	55	7		
	飲食業	女	60	3		
洋服業	男	35	2			
住吉2区	製薬業	男	40	5		本籍地は愛媛県越智郡
	日雇い人	男	45	9		
	無職	女	70	1		
	製材雑工	男	45	3		
	古物商	男	35	2		
	農業	男	26	3		
	特殊飲食業	男	32	5	8	
	会社員	男	51	6		
	溶接	女	53	3		
	無職	女	38	4		
	無職	女	44	4		
	無職	女	86	1		
	大工	男	51	4		
	無職	男	74	1		
	教員	男	40	5		
	飲食業	男	56	3		
無職	男	53	1			

（豊町教育委員会所蔵「配給台帳」により作成）

以上のように、御手洗では外部者を対象とした非日常の空間が地域住民の日常の空間から隔離されていたわけではなく、両者は混在しあい、地域住民にとって身近なものとして存在していたといえることができる。

IV 御手洗における芸娼妓と地域住民

1) ベッピンの生活

次に、戦後の御手洗においてオチョロ舟の漕ぎ手である「チョロ押し」として働いた経験をもつ男性（K氏）からの聞き取りと豊町教育委員会所蔵の新聞記事を主な資料として、昭和30年前後のベッピンの生活について述べていくこととした。

K氏がチョロ押しとして御手洗にやってきたのは、第二次大戦後のことである。前述の通り、この時期には芸妓はほとんど存在なくなり、花街で働く女性の大半がオキゲイシャとなっていた。K氏によれば、戦後の御手洗で生活し、ベッピンとして働いていた女性のほとんどは、御手洗に来る前に、他所で娼妓としての経験があり、御手洗で初めて娼妓となる女性は全体の二割程度にすぎなかったという。また、K氏からみると、ベッピンは2通りのタイプに分かれていたように感じられた。その一つは親兄弟の生活費や学費を稼ぐために身売りしたベッピンであり、彼女らは性格が「おとなしい」、「優しい」といわれて客に好まれ、馴染み客が出来やすかった。もう一つのタイプは体に刺青を入れたり、薬物中毒が疑われたりするベッピンであり、そのような女性は「アバレモン」と呼ばれて客からはあまり人気がなかったという。年齢は若くて16、7歳、年長の者でも25歳くらいまでと自称することが多かったというが、実際のところは不明である。本名や出身地をベッピン本人が明かすことはほとんどなかったが、四国や炭田と関わりの深い筑豊地方などから御手洗へ来ていた女性が多かったと言われている。

ベッピンたちは、普段はいわゆる源氏名で名を呼ばれていた。戦前は「〇〇奴」や「〇〇千代」

のような名が多かったが、戦後になると「〇〇子」などの名が使用されるようになった。彼女らはオナゴヤで生活しており、オナゴヤではたいてい6～8畳程度の一人部屋が与えられていた。K氏は築地通りに面して立地していたあるオナゴヤにチョロ押しとして勤めていが、このオナゴヤの場合、2階に6畳間が4部屋あり、ベッピンはそこに住んでいたという。

服装については、戦後のベッピンたちの多くはカンタン服や、アッパッパーと呼ばれるワンピース状の服を身に着けることが多く、和服は旅館に呼ばれるときなど限られた場合のみ着用していたという。ベッピンは服装や化粧が島の娘たちの外見とははっきりと異なっていたため、ベッピンであることが外見から一目瞭然であった。

聞き取りによれば、ベッピンとチョロ押したちの日常は次のようなものである。ベッピンは毎日、15時ごろになると風呂屋や髪結いへ行き、身繕いを済ませ、17時ごろからオチョロ舟に乗り込む。ベッピンを乗せたオチョロ舟はまずブイに繋がれ、客となる船が入港してくるのを待つ。客との交渉の順番は輪番制になっており、船が入港すると、オチョロ舟はその日の順番に従って1艘ずつ船に漕ぎより、チョロ押しが交渉を始める。ただし、馴染み客の船が入ってきた場合には順番に関係なく、そのベッピンを乗せたオチョロ舟が交渉する慣例になっていたという。この時刻、御手洗の港にはオチョロ舟だけではなくウロ船と呼ばれる、停泊船の船員を相手に食べ物や飲料水などを売って出ている。ウロ船では酒やうどん、ミカンなどの果物が売られており、交渉の順番を待つオチョロ舟のベッピンたちもこれを食べながら花札に興じることもあったという。

交渉の順番が来るとブイから離れて停泊船にオチョロ舟を漕ぎ寄せ、まずチョロ押しが停泊船にあがって客と交渉を始める。チョロ押しにとってはここが腕の見せどころであり、うまく客をその気にさせようと様々な方法で交渉するという。K氏は本来の揚げ代が1,000円であっても、「ほんま

は1,200円じゃけど1,000円でいいわいね」などと言ってまず交渉し、手ごたえを感じると、乗員の数と同数のベッピンを船に上げ、彼女らに直接客を口説かせていた。一人のベッピンに対して複数の客から希望が出た場合は「対抗を打つ」といって、揚代をつり上げ、より高い値をつけた客を選んだ。揚代を吊り上げる交渉をするのはベッピンであり、うまくいけば1,500円から1,600円くらいにまでは値を上げることができた。交渉が成立すると、客は揚代をチョロ押しに支払う。この揚代の半分はオナゴヤのものになり、残り半分がベッピンの収入となった。

一方、交渉不成立になるとオチョロ舟はブイのところに戻り、次の順番が回ってくるのを待つ。何艘かと交渉するうち、たいていは22時か23時、遅くとも午前1時くらいにはオチョロ舟に乗せていたベッピンは全て停泊船に移り、チョロ押しの仕事はいったん終わりとなる。しかし、時にはこの時間を過ぎて客との交渉が成立しないベッピンが出ることもあった。このような客が見つからない状態のことを「お茶をひく」と表現した。お茶をひくことになったベッピンは、顔見知りの客に頼みこんで「買って」もらうか、チョロ押しが揚代を立替えてでも買ってもらうなどして、最終的には「売れない」女性が出ることはあまりなかったという。翌朝5時ごろ、チョロ押しはオナゴヤに宿泊した客をオチョロ舟に乗せて停泊船まで送り、その後停泊船に泊まったベッピンたちを連れて戻った。その後、チョロ押しは砂などで汚れやすいオチョロ舟の清掃を行った。

ベッピンたちを乗せるオチョロ舟の漕ぎ手であるチョロ押しは、それぞれのオナゴヤの専属として雇われていた。オナゴヤは多くの場合、5、6名程度のベッピンを抱えていたが、なかには抱えるベッピンの数が2、3名程度の小規模なオナゴヤも存在した。そのような場合は、小規模なオナゴヤ同士が2軒、あるいは3軒共同で一つのオチョロ舟を所有していることもあったという。またチョロ押しの住居はオナゴヤが用意しており、多くは築地通り周辺の裏通りに居住していた。

チョロ押しの職についていた人々はほとんどが男性であり、島外から御手洗に移住してきた者が多いという。K氏自身は豊島で生まれ、呉で就労していたところ、知人であった御手洗のオナゴヤの主人からチョロ押しにならないかとの誘いを受けた。彼はオナゴヤの主人が「心安い人」であったため、誘いに応じて御手洗に移住し、チョロ押しの職についたという。

またチョロ押しは日常の仕事以外に、芸娼妓を周旋する業者との交渉に出向く店主に同行したり、新たに雇い入れるベッピンを迎えに行ったりすることもあったという。新たなベッピンを受け入れることが決定すると、オナゴヤの店主は着物や宝石、洋服や時計など、身の回りの品を調える。これらの品物の多くは竹原や呉からやって来る行商人から購入することが多く、その代金は彼女らの前借に加算された。前借とは働き始める際にオナゴヤの主人から借り受ける借金のことであり、これを返し終わるまでがオナゴヤとの契約期間であったという。御手洗では、前借を返し終わったベッピンの中には、他所で店を構える者なども多かったが、なかには御手洗の青年の妻になる女性などもあったという。また、前借を返し終える前に漁師や船員に身請けされる女性も少なくなかった。

一方で、御手洗から逃亡したり、馴染み客と駆け落ちしたりするベッピンも少なからず存在した。K氏自身も、御手洗から逃亡したベッピンが徳島で発見され、徳島まで出かけて女性を連れ戻してきた経験を持っている。また昭和12年(1937)の中国新聞には、小松と呼ばれていた17歳の芸妓の服毒自殺の記事が掲載されている¹⁴⁾。小松は広島出身であったが、父親を亡くしたことから、6人の兄弟のために尋常小学校6年の時に前借250円で大崎上島の木之江遊廓において芸妓見習いになり、さらに15歳の時に前借が750円に膨らんで御手洗へ「くら替え」してきた。記事によれば、自分ほど不幸な者はないから死にたいと常に言っていたとあり、芸妓としての境遇に耐えかねて自ら死を選んだとされている。

2) ベッピンと地域住民との交流

前述の通り、御手洗における花街の特徴のひとつは、花街が空間的に地域社会から隔離されていたことである。通常、地域から隔離された遊廓では、娼妓の行動は厳しく規制され、遊廓外に出ることは原則として許可されない場合が多かった。しかしながら御手洗では芸娼妓の行動には比較的自由が認められており、地域住民との接触、交流もほとんど規制されることはなかった。ここでは、聞き取りと豊町教育委員会所蔵の新聞記事から、御手洗における芸娼妓と地域住民との交流について記述していく。

明治末期以降、商業港としての機能が低下していた御手洗において、花街がもたらす経済的利益は大きなものであった。そのため、御手洗においては花街で働く芸娼妓に対する蔑視の意識は少なく、むしろ彼女らに対する様々な気遣いがなされていた。その一つが、芸娼妓に対する年に一度の「慰安日」である。慰安日は芸娼妓の慰労を目的に設定されたものであり、その日はオナゴヤの営業が停止されて芸娼妓も全て休業し、芸妓組合が主催する宴会や映画などの興行に参加することになっていた。

昭和12年（1937）4月20日の中国新聞¹⁵⁾によれば、慰安日には御手洗町芸妓協同組合が主催する宴会が開催され、90余名の芸娼妓が参加したとされている。午後は仲間同士で宴会に興じる者や、「ランデブー」に出かける者もいたとあり、19時からは乙女座（映画館）で漫才の興行が行われた。昭和13年（1938）4月23日の記事にもこの「慰安日」が取り上げられており、この日は芸妓検番において80名余りの芸娼妓のほか、木之江警察署長や町長を招いた宴会が催されたとされている¹⁶⁾。この年は宴会の後、19時から乙女座で芸娼妓を招いてキネマ鑑賞が行なわれた。ここでは、慰安日の宴会に警察署長や町長が列席している点も興味深い。町の行政的な中心人物とみなされる両者が芸娼妓の慰安に訪れていることは、御手洗における芸娼妓の重要性と、彼女らを尊重する意識を反映したものであるといえる。

さらに御手洗では芸娼妓を対象として芸妓学校が開催されていた。これは、十分な教育を受けていない者の多い芸娼妓の待遇改善を目的としたものであった。昭和5年（1930）の中国新聞¹⁷⁾によれば、御手洗小学校長や町長をはじめとする有志らによって「芸妓学校」が創設され、授業が開始されたとある。芸妓学校の授業内容は学科や徳育、裁縫などであり、週5、6時間の授業が予定されているとある。この芸妓学校が継続的な事業として定着していたか否かは不明であるが、芸娼妓を対象に教育機会を設ける試みは、大正期に高まった娼妓解放運動などの影響を受けて、御手洗住民の間に芸娼妓の保護、待遇改善の必要性が認識されていたことを示すものである。このほかにも、祭礼や運動会などといった島の行事に芸娼妓を参加させていた。たとえば、祭礼の日には芸娼妓は三味線を弾いて祭りを盛り上げ、さらにダンジリに乗る島の青年に腰巻きやシャツなどを贈ることもあったという。また運動会では、芸娼妓が島の女子青年団と対抗するなどして運動会を盛り上げたという。

御手洗において芸娼妓との交流が最も頻繁であったのは、島の青年たちであった。ベッピンと島の青年が恋愛関係になることも少なくなかったようであるが、オナゴヤの主人もそれを咎めることはなかった。島の青年らはベッピンを誘って乙女座へ映画を見に出かけ、あるいは料理屋でともに食事をとることもあった。また、ある話者には、ベッピンに服をねだられ、シャツやワンピースを仕立て屋で作らせ、贈り物にした思い出もあるという。ベッピンにとっても島の青年を恋人に持つことは誇りであり、仲間内で自慢する風潮もあったという。こうした付き合いから島の青年と結婚し、前借を返還した後に御手洗で生活し続けるベッピンも存在した。

また、オナゴヤには「仕込み」と呼ばれる少女が住み込んでいる場合があった。彼女らは10歳前後でオナゴヤに引き取られ、将来芸妓となるために学校に通いながら三味線や唄などを習う。戦後には仕込みの少女は少なくなったが、昭和戦前期

生まれのある話者によれば、尋常小学校の同級生には仕込みの少女が3人ほどいたという。仕込みの少女たちはオナゴヤに住んでいるからといって学校の同級生仲間から疎外されるようなことはなかったというが、放課後は芸事の修業をしなければならなかったため、ほかの子供たちと遊ぶことは少なかった。しかし、彼女らが成長して芸妓となってからも、会えば親しく言葉を交わす仲であったという。

以上のように、御手洗の地域住民にとって花街やそこに生活するベッピンは身近なものであり、ある種の親しみといってもよい感情が存在していた。しかし、一方で「化粧をしたりおしゃれをしたりすると母親から『ベッピンじゃあるまいし』とたしなめられた」という話が複数の女性の話者から得られた。この話からは、ベッピンは身近な存在とはいっても、地域住民、特に女性たちがベッピンを一般の女性とは異なる特殊な女性として認識し、区別していたことをうかがうことができる。また同じ花街の女性であっても、芸事ができるというだけではなく、容姿にすぐれ、教養、話術などを身につけているオカゲイシャは、オキゲイキヤよりも格が上であるという意識が存在していたといふ。

V おわりに

これまでみてきたように、御手洗における花街の様相は、江戸吉原に代表される大都市の閉鎖的な遊廓のイメージとは大きく異なるものである。御手洗の花街は「廓」と呼ばれる特別な地域として隔離されていたわけではなく、築地通りを中心にしながら、飲食店なども含めると町内の広い範囲に散在していた。花街を構成するサービス業以外の商工業者なども築地通りの周辺に混在して居住しており、花街や芸娼妓の存在は空間的にも心情的にも、地域住民にとってきわめて身近なものであった。また一般的に、芸娼妓に対しては強い差別意識がもたれることもあるが、御手洗ではベッピンを一般女性とは異なる特殊な女性とみな

しながらも、彼女らを地域の一員として扱い、疎外することはなかった。

このような地域住民の遊女への親しみや配慮は、昭和期に限定されるものではないと考えられる。現在、御手洗には江戸時代からの遊女墓が100基以上残されている。吉原などの大都市の遊廓ではこのように多数の遊女墓をみることはほとんどなく、寺の門前に亡くなった遊女の遺体を打ち捨てた話なども伝わっているほどである。松岸遊廓においても、遊廓で亡くなった遊女は村の檀那寺の一面にまとめて葬られ、遊女個人の墓石はわずか1基が残されているのみである。これに対し、亡くなった遊女を手厚く葬り、墓石を立てた御手洗の遊女墓は、彼女らを尊重しようとする地域住民の感情の現れであろう。

こうした状況は御手洗における花街の存在の大きさを示すものである。機帆船の導入などによって港町としての機能が縮小しつつあった大正期以降、花街への経済的な依存度はさらに高まっていったと考えられる。こうした状況の中で御手洗の地域住民にとって芸娼妓は身近な存在であり続け、ともに町を支えるという一種の連帯感が存在していたと考えられる。

付 記

本稿の作成にあたって、豊町教育委員会（当時）の皆様には、資料の閲覧などの便宜をはかっていただいたほか、調査全般にわたって多くのご教示を賜りました。現地調査では八重垣正夫氏、北林早喜氏をはじめとする御手洗町の皆様に多大なるご協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

注および参考文献

- 1) 山近博義 (1996) : 文学作品に見られる近代盛り場 - 明治・大正期の京都新京極の場合, 地理学報, 31, 17~31。
- 2) 前島裕美 (2001) : 近現代における地方小都市の盛り場の復原 - 水郷潮来の変遷を事例として -, 歴史地理学, 43-4, 18~31。
- 3) 加藤政洋 (2005) : 『花街 - 異空間の都市史』, 朝日

新聞社。

- 4) 加藤晴美 (2004) : 松岸地区における遊廓の成立と展開, 歴史地理学調査報告, 11, 67~84。
- 5) 前掲3), 18~19。
- 6) 清水克志 (2009) : 廻船寄港地御手洗町の繁栄とそのなごり, 歴史地理学野外研究, 13, 77~100。
- 7) 豊町教育委員会編・発行 (2000) : 『豊町史』, 110~111。
- 8) ケンペル『江戸参府旅行日記』, 斉藤信訳 (1979), 東洋文庫。
- 9) 御手洗には江戸時代の茶屋である若胡屋を舞台とした伝説が伝わっている。その内容は以下の通りである。若胡屋の禿 (花魁の身の回りの世話を担当する遊女見習いの少女) が花魁におはぐろをつけるように勧めた。しかしこの日はおはぐろのつきが悪く, 客を待たせている花魁は痲癩をおこして, 禿の口に煮えたぎっているおはぐろを流しこんでしまった。禿は血を吐いて絶命したが, その後, 花魁が鏡を覗くたびに死んだ禿の声が聞こえたという。そのため罪悪感に苦しんだ花魁は遍路に旅立ったが, それ以来, 若胡屋では遊女を100人置くと必ず1人死んで99人になったとされている。
- 10) 前掲3), 1ページ。
- 11) 前掲7), 673~674。
- 12) 豊町教育委員会所蔵, 中国新聞, 昭和6年 (1931) 9月7日。
- 13) 前掲6), 79ページ。第2図を参照。
- 14) 豊町教育委員会所蔵, 中国新聞, 昭和9年 (1934) 9月7日。
- 15) 豊町教育委員会所蔵, 中国新聞, 昭和12年 (1937) 4月20日。
- 16) 豊町教育委員会所蔵, 中国新聞, 昭和13年 (1938) 4月23日。
- 17) 豊町教育委員会所蔵, 中国新聞, 昭和5年 (1930) 4月20日